

場委員長，ほか 20 名。

1. 昭和 54 年度基共研会計実績報告
2. 昭和 55 年度基共研予算原案の説明
3. 各部会活動報告
4. 新規部会テーマの審議

関係学協会から提出されたテーマ案を審議した結果，次の 2 部会が 55 年度から発足することになった。

- ①仮題「融体異相間反応」
- ②仮題「溶融点直下の鋼の力学的性質」

高温変形部会

第 12 回部会 開催日：11月29日。出席者：田村部会長，ほか 24 名。

1. 講演

- (1) 高温変形における加工硬化率と回復速度
- (2) 動的再結晶前駆段階の加工硬化と回復
- (3) 炭素鋼の高温変形特性と強度
- (4) 高窒素含有オーステナイト形ステンレス鋼の高温引張延性

(5) 高温変形後の回復に及ぼす歪時効の影響

2. 第 2 回シンポジウムの開催準備

第 2 回のシンポジウムを来年 3 月 26 日に開催することを決定した。講演は「制御圧延技術の基礎とその展開」のテーマで 7 題目を予定している。

鉄鋼材料の摩耗部会

第 3 回部会 開催日：12月7日。出席者：木村部会長，ほか 23 名。

1. 研究発表

(a) 摩耗に及ぼす雰囲気，面圧，潤滑等の影響について，機械技研・津谷委員より広範な説明が行われた。

(b) ロールユーザの立場で鉄鋼メーカーより次の研究発表と討論が行われた。

圧延ロールの摩耗に関する諸問題（新日鉄）

放電ダル加工ロールの実用効果（鋼管）

2. ロール摩耗の問題点提起

本部会でとり上げるべき問題点として 4 件の発表が行われた。

書 評

製鉄ハンドブック

重 見 彰 利 著

地 人 書 館

定 価 6,500 円

ページ 397 ページ

戦後日本の製鉄技術は飛躍的な進歩をとげた。それにつけても思い出すのは戦争直後に出版された和田亀吉著の実際製鉄法である。私は出版後しばらくたつてから注文したら絶版になつていて，出版元で古本を探してもらつて手に入れた思い出がある。その後鉄鋼便覧や鉄鋼技術講座など便覧・講座類が次々に出版され，我国の鉄鋼技術水準の高さを示しているが，多少詳しすぎるきらいもあり，また分担執筆をしていることもあるので，製鉄技術に関しては 1 人の人の書きおろした本は非常に読みやすい。

本書はまさにそれに当たり，長く製鉄会社の技術研究所で製鉄研究を担当された著者が，製鉄技術の基礎から実際操業，さらに進んで将来の技術の動向に至るまでを一冊の本にまとめられたことは時期を得たものといえよう。

本書の内容は，第 1 章では高炉製鉄法のプロセスとしての特徴を説明し，第 2～4 章では製鉄法の基礎になる物理化学，鉄鉱石の還元やスラグについて詳述し，第 5～6 章では高炉内の状況や操業を理論とむすびつけて説明し，高炉の設計法にまで及んでいる。第 8～9 章では将来の製鉄法としての原子力製鉄や直接製鉄法について述べ，第 10，11 章では各種試験法を説明し，高炉計算でしばしば必要となる基礎データの表を集録している。

このように本書は著者の長年の経験に基づき集大成されたもので，製鉄担当者はもとより，これから製鉄技術を学ぼうという学生，院生諸君にとつても役立つものと思ひ，ここに推薦する次第である。（相馬胤和）